



三題噺三篇 (1)



すべて撃ち殺す狂った弾丸

『三題噺 昨日、ライトノベル、猫』

『三題噺 昨日、ライトノベル、猫』

俺は昨日、会社を退職した。

念願のライトノベル作家になるためだ！

たった一度の人生なのだ。

くだらない仕事で時間を無駄にしたくない！

とりあえず、テーマを決めよう。主人公は普通のゲーム好きの高校生で異世界に飛ばされて……

「おい」

？

俺を呼ぶ声がある。

部屋には俺と猫しかいないはず。

おかしいな。だれだろう。

「おい。かいぬし」

猫だ。

猫が喋っている。

「かいぬし、なんでしごといかない」

「お前……喋れるのか？」

「ねこはしゃべれる。かくしてるだけ。それより、なんでしごといかない」

そうだったのか。まあたいしたことじゃない。とりあえず俺の決意を猫にも伝えよう。

「俺もう仕事辞めたんだ！ ライトノベル作家になるぜ」

「かいぬし、ライトノベルさっか、おさかなたくさんもらえるのか？ カリカリは？」

「おう、一発当てたら魚もカリカリもたべ放題だぜ！ まってろよな！」

「どれくらい？」

「え？」

「どれくらいまでばいいの？」

「どれくらいって……」

俺は言葉を失った。

「あした？ あさって？」

「うーん、そんなはやくはないかな……」

そう答えるのが精いっぱいだった。

「ねこ、ながいきできないから……」

「……」

ねこがしゅんとしている。

俺はライトノベル作家になっていいんだろうか。

早くも決意が揺らぎ始めた。

ごめんな、猫。

お前のことなんてなにも考えてなかった。

「猫、俺はどうすればいいと思う……？」

「かいぬしのすきにすればいいんだよ」

猫は弱々しく答えた。

人間なのに猫にこんな答えをさせてしまってよかったのだろうか。

俺の大切な猫。

その猫に苦労させていいのか？

もう一度、訊いてみよう。

「猫、もう一度聞くぞ。本当のことを言ってくれ。俺にどんな仕事してほしいんだ？」

「おさかないっぱいのしごと」

「わかった」

そうして、俺はライトノベル作家を目指すのを辞めた。

代わりに、俺は漁師になった。

毎日、品物にならない魚を猫にあげた。

猫はすぐ死んでしまったが、幸せそうだった。

『三題噺 列車、妹、絵画教室』

『三題噺 列車、妹、絵画教室』

その男は、東京のデザイン会社に勤めていた。
父親は美大の教授、母親はイラストレーター。
芸術に囲まれて育ち、その才能を受け継いで、今では自分もデザイナーとして活躍している。
そんな男のもとに、ある日、一本の電話がかかってきた。
内容は、母親からの、美大を目指して絵画教室に通っている妹が、踏切から線路に侵入し横になり、列車に轢かれ自殺したというものだった。
男は大層悲しがって、仕事を休み、田舎に帰ることにした。

実家に帰る列車の中で男は様々なことを思い出した。
芸術一家なだけあって、彼は幼いころから妹とよく絵を描いて遊んでいた。
男の作品は色彩に優れ、計算されたものだったが、妹の作品は、自由で、のびのびとした、明るいものだった。
男はしばしばその妹の自由な作風に、惹かれ、また、嫉妬した。
彼にはない才能が妹にはあった。
しかし、色彩や構図の勉強を熱心に行い、作った作品は、絵では受けがよくなかったが、デザインとして開花した。
そうして今は、男の作ったデザインが、企業の広告や商品で少しだが利用されるまでになった。
男が思い出にひたっていると、電車が目的地に到着した。

実家に帰ってから、通夜、葬儀とその準備に追われ、男は多忙だった。
だが、それが終わり、一息つくと、次は会社のことが彼の頭に浮かんだ。
今の彼はちょうど、仕事も任されるようになり、世間で評価されかけている大事な時期。
プレッシャーや忙しさもあって、あちこちに体の不調も出ていたが、長く休んでいるわけにはいかなかった。
懐かしい家を少し回って、両親に挨拶したら帰ろうと、男は思った。

自分の部屋で昔の作品を見た後、ふと、妹の部屋が男の目にとまった。
彼女は何を思って自殺したのだろうか。
好奇心から、男はドアを開けた。

中には彼女の最近の作品が壁にかかった部屋がある。
本棚には絵画の技法書がぎっしりと詰まっており、好きだった漫画本の一冊もない。
まさに、絵のための部屋であった。

『三題噺 タバコ、水着、ブログ』

『日暮れの闇』

「はぁ、今日も練習大変だった……でももうすぐ定期演奏会！ 頑張らなきゃ。みんな来てね～！！」

「県大会2回戦、接戦だったけどなんとか勝利。今年こそ甲子園に行く。今年は優秀なメンバーが多いからきっとできるはず。次の試合でも仲間たちを信じて投げる！」

俺の趣味は同級生のブログ観察。

とは言っても、別に好きなわけじゃない。

他にすることがないから見てるだけだ。

俺は小学校、中学といじめに遭い、高校には行っていないし、行きたいとも思わない。

どうせ高校にいても、またいじめられるだけ。

スポーツもできない、頭も悪い、芸術の才能もない、明るく面白いわけでもない。

そんな取り柄のない弱者は、どこに行っても食べ物にされる。

だから進学のための勉強もしていない。

そこで時間が有り余って、ネットをし、同級生のブログを見ている、というわけだ。

その日も、特にすることがなく、同級生の名前をサーチエンジンに入力した。

遠藤早紀。

俺をいじめていた主犯。

成績は悪かったが、明るく、垢ぬけていて、お洒落。流行にも敏感で、女子たちから一目置かれ、男子からの人気もあった。

しかし、その分、目立ちたい、ちやほやされたい、という思いが強かったのだろう。

俺は取り柄もないし、人と距離を縮めるのが苦手で、無口な上、誰に対しても淡泊だったので、それが気に障ったのかもしれない。

とにかく、彼女に気に入られなかった。

それからというもの、クラスの全員が敵になった。

教師はグループになじめない俺の方を悪者扱いした。

誰も助けてはくれなかった。

俺は学校に行くのを辞めた。

そんな事を思い出していると、遠藤早紀のブログがヒットした。

俺は早速ページを見る。

「今日は彼氏と海行ってきたー。ちょーたのしかった♡♡♡」

記事には短い文章と彼女が水着を着ている写真。

俺の中で何かが切れた。

俺だって普通の生活を送り、恋人を作りたかった。

好きで孤独な生活を送ってるわけじゃない。

何でアイツばかり幸せそうな日々を過ごしてるんだ。

許せない。

罪を償え。

その日から毎晩、俺はレンガをもって出かけた。

遠藤早紀の家は知っている。

僕は彼女の家と最寄り駅の間にある公園で、彼女が来るのを待った。

その後も彼女のことを調べると、どうやら年上の男性と付き合っており、一緒に酒を飲んで遅く帰ることがあるらしい。

飲酒を通報して高校を辞めさせてもよかったが、それだけでは俺の気は収まらない。

その身を持って罪を償え。

そんな事を続けて4日目、ついに彼女が通りがかった。

終電だった。

彼女は千鳥足で、正気ではないのが見て取れた。

深夜で人の気配もない。

馬鹿な女だ。

俺は背後から回り込んで近づく。

彼女が気付く様子はない。

レンガを後頭部めがけて思い切り振りおろす。

鈍い音。

彼女は地面に倒れる。

血が流れる。

まだ足りない。

俺の恨みはこんなもんじゃない。

殴る。

殴る。

頭の形が変わっていく。

殴る。

殴る。

レンガが血で赤く染まる。

殴る。

殴る。

殴る。

.....

.....

俺はレンガを公園の藪の中に放り投げ、彼女の脈がなくなったのを確認し、家に帰った。

犯人の捜索が行われた。

俺はどうしてもよかった。

捕まっても。

どうせこの先生きててもなにもいいことはない。

中学でドロップアウトした人間に将来はない。

しかし俺をこんなふうにしたアイツにも、もう将来はない。

それで満足だった。

警察は来なかった。

僕は勉強を始めて、通信制の高校に通った。

人づき合いが苦手だったのは改善され、登校日には友人と話すまでになった。

勉強にも集中でき、嘘のように成績は上がった。

そして、仲間内で一番の大学に入った。

大学ではバドミントンのサークルに入り、そこで彼女もできた。

高田まゆか。

色白で、黒い髪は肩の下あたりまで伸び、活発で、どちらかと言えば暗い俺も彼女と居れば明るくなれた。

彼女の優しさは僕を癒し、辛いことを忘れさせた。

もう同級生のブログは見なくなった。

過去は過去、今を楽しめば良い.....。

二人でいろいろな場所に行った。

プラネタリウム、遊園地、映画館、美術館.....。

喫茶店でおしゃべりするだけでも楽しかった。

彼女は行く先々で携帯で写真を撮っていた。ブログに上げる予定らしい。

「二人の思い出を残したいんだ」

素敵だね、と僕は言った。

その日の夜は彼女と一緒にバーでお酒を飲んでいた。

彼女は実家暮らしなので、外泊は認められていなかった。

「大丈夫？ 送ろうか？」

「ううん、送ってもらおうと、君が帰れなくなっちゃうよ！ 大丈夫だから」

そう言って、彼女は帰ってしまった。僕に迷惑をかけたくないのだろう。

そんな気を使うところも、僕は好きだった……。

次の日のニュースで、彼女が死んだのを知った。

撲殺だった。

涙は流れなかった。

俺はタバコを吸った。